

はリンク

はWAMNETの事業者情報にリンク

事業所名 新賀 (きのこのき)

日付 平成 20年 3月 4日
特定非営利活動法人

評価機関名 ライフサポート

評価調査員 介護支援専門員経験5年

評価調査員 在宅介護経験15年

自主評価結果を見る

評価項目の内容を見る

事業者のコメントを見る(改善状況のコメントがあります!)

1. 評価結果の概要

講評

全体を通して(特に良いと思われる点など)

平成13年4月に設立して、現在7年目を迎えた。当初から利用者一人ひとりの歩んで来た道を知り、個別ケアを第一に考えて、利用者を最期まで看させてもらうという考えは、法人全体としても共通のケアの方針であり、特にグループホームにおいては、その考え方とチームケアのあり方は一貫している。

このホームの統括管理者は、設立当初からずっと継続して就任しており、リーダーや計画作成担当者など主な職員も設立から従事していた人が多い。このホームの設立当初からを振り返って見ると、約半分位は利用者の認知症のレベルも比較的良く、ADLも良い人が多く、自己主張する人も多かった。利用者9人が一緒にいると、大世帯のもめごとが多く、皆が生きているという活力旺盛で、職員が振り廻されて、ストレスの塊だったと振り返って説明してくれた。その後利用者の状態も変化し、症状も進んできたので、9人の利用者の意欲も低下し、利用者のいざこざも少なくなり、ゆったりとした生活感が味わえるようになった。問題があれば、ミーティングを繰り返し、上司にも入ってもらって、職員全員でよく話し合ったそうだ。このような体験を経て、家庭の延長である現在のホームを築いてきた。

利用者・職員の垣根を越えた自然なやり取りからは皆で大きな家族のような親身な温もりを感じる。ホームは開設して7年を経過し、様々な試練を乗り越えた経験による余裕が全体に漂い、見ていて危なげなく安心感がある。「高齢だから肉より魚が好きだろうと考えただけけど、うちの利用者は魚より肉が、揚げ物が好きな人が多い。年寄りだから、田舎暮らしだからと固定観念に捉われず、本当にその人の望むことに合わせていきたい」と職員は言う。殆んど寝たきりのGさんの横に職員が座っている。「最初からここに居るのは、もう私とGさんだけになってしまったね」Gさんの手に手のひらを重ねて置きながら職員が言う。話はできないけれどGさんは大きく目を見開いて、じっと職員を見つめている。昔のGさんは、しっかりしていて「百まで生きるんじゃ」といつも言っていたそうだ。「百まで頑張るんよね」職員の言葉にGさんは大きく頷いた。目と目で気持ちが通い合う言葉を越えた信頼の心がそこにある。Gさんの表情には、安心感が漂っていた。特別な事は何もなくて良い。利用者一人ひとりの気持ちを大切にしたい無理のない自然な流れの日常は、何物にも変え難い生きている事の証しだ。本当の意味での利用者の生活が息づいていた。

ホームは家族との関わりを大切に考え協働して利用者を支えていこうと考えている。家族が主体で、ホームはお手伝いをする立場である事をよく説明し伝えているそうだ。互いに相談し合い交流を深めるうちに、家族の認知症に対する認識が深まり、利用者との関係が修復できたケースも多い。

特に改善の余地があると思われる点

母体法人から指図される事なく自由にやらせてもらっていると職員達から聞いた。より良いケアを目指す職員達は生き活きしていた。今後もその輝きを持続させていってくれる事を期待している。

2. 評価結果 (詳細)

I 運営理念

番号	項目	できている	要改善
1	理念の具体化、実現及び共有		
記述項目	グループホームとしてめざしているものは何か		
記述回答	<p>1. 自主評価について…: ホームとしての介護のあり方について、管理者・職員は常によく話し合い認識の共有ができています。全員で取り組む体制が整っているため、改善項目は特にない。</p> <p>2. 全体的に見て…: ホーム開設時に職員達は相談してホームの名前“きのこのき”の頭文字になぞらえて“気持ちの良い環境で、のんびり楽しく暮らす、幸福な生涯に感謝し、残る余生を有意義に、清く美しく気力充実”の理念を作ったようだ。それから7年を経過した今は更に発展し、利用者一人ひとりの気持ちを大切にそれに応えていきたいと考え、特別な事はせずに、自然な状態で生活する普通の家庭の延長のようなホームを目指していると聞いた。様々な経験を通して実践から生まれた言葉からは、肩の力を抜いた余裕と自信を感じた。</p>		

II 生活空間づくり

番号	項目	できている	要改善
2	家庭的な共用空間作り		
3	入居者一人ひとりに合わせた居室の空間づくり		
4	建物の外回りや空間の活用		
5	場所間違い等の防止策		
記述項目	入居者が落ち着いて生活できるような場づくりとして取り組んでいるものは何か		
記述回答	<p>1. 自主評価について…: 2階建ての建物の一階部分と二階部分に居室が分かれています。二階部分にも共有スペースや調理台を配置し、中庭や客間もある。利用者の状態に応じて対応できる配慮があり、ハード面の生活空間は充実している。現状に合わせて利用できているので問題なしと判断している。</p> <p>2. 全体的に見て…: Aさんは1段高い畳の間の炬燵で座椅子にもたれて新聞を読むのが日課、疲れたら横になって昼寝もできる。編み物道具一式が入ったマイバッグを横に置き、長ソファの隅で大好きな編み物を楽しむBさん、窓際の長ソファに横になって皆の様子を見ているCさん等、それぞれお気に入りの居場所がある。昔懐かしいBGMの音楽がリビングに静かに流れている。Cさんが曲に合わせて歌い出し、Bさんも編み物しながら口ずさむ。いつもと同じ寛いだ日常が心地良い。</p>		

III ケアサービス

番号	項目	できている	要改善
6	介護計画への入居者・家族の意見の反映		
7	個別の記録		
8	確実な申し送り・情報伝達		
9	チームケアのための会議		
10	入居者一人ひとりの尊重		
11	職員の穏やかな態度と入居者が感情表現できる働きかけ		
12	入居者のペースの尊重		
13	入居者の自己決定や希望の表出への支援		
14	一人のできることに配慮		
15	入居者一人ひとりに合わせた調理方法・盛り付けの工夫		
16	食事を楽しむことのできる支援		
17	排泄パターンに応じた個別の排泄支援		

III ケアサービス(つづき)

番号	項目	できている	要改善
18	排泄時の不安や羞恥心等への配慮		
19	入居者一人ひとりの入浴可否の見極めと希望にあわせて入浴支援		
20	プライドを大切にした整容の支援		
21	安眠の支援		
22	金銭管理と買い物の支援		
23	認知症の人の受診に理解と配慮のある医療機関、入院受け入れ医療機関の確保		
24	身体機能の維持		
25	トラブルへの対応		
26	口腔内の清潔保持		
27	身体状態の変化や異常の早期発見・対応		
28	服薬の支援		
29	ホームに閉じこもらない生活の支援		
30	家族の訪問支援		
記述項目	一人ひとりの力と経験の尊重やプライバシー保護のため取り組んでいるものは何か		
記述回答	<p>1. 自主評価について…: 母体法人のバックアップもあり、職員研修は充実し、そのレベルも高く意欲的である。介護計画作成過程においては、これまでの人生歴の把握に努め、重度化の為気持ちを表現出来ない利用者に対しては、以前口癖のように言っていた事をプランに反映させる等、その人らしさを尊重した取り組みを見た。</p> <p>2. 全体的に見て…: Dさんが何となく沈み込んでいる。職員がEさんに「人生の先輩だから色々話してあげてよ」と声をかけると、Eさんは気長にDさんの話を聞いてくれる。夕方になるとEさんが「娘に会いたい」と言い出した。「私も一緒じゃ。でもここには皆があるから寂しゅうはないよ。まあ一緒にお茶でも飲もうよ」とDさんがEさんを誘う。職員は控え目に利用者達のパイプ役を上手くこなし連帯感を引き出している。共に暮らす者同士の助け合いが生まれている。</p>		

IV 運営体制

番号	項目	できている	要改善
31	責任者の協働と職員の意見の反映		
32	災害対策		
33	家族の意見や要望を引き出す働きかけ		
34	家族への日常の様子に関する情報提供		
35	運営推進会議を活かした取組		
36	地域との連携と交流促進		
37	ホーム機能の地域への還元		
記述項目	サービスの質の向上に向け、日頃から、また、問題発生を契機として、努力しているものは何か		
記述回答	<p>1. 自主評価について…: 母体法人関連施設と共に、人里離れた小高い丘の上にホームがある。立地条件の制約があり、気軽に地域に出て行ったり、来てもらったりする事は無理である。同一法人のグループホームで住宅地ができていて、自然な近所付き合いがあるので問題ないように思える。しかし、ホームは更に上を目指し、運営推進会議等をきっかけに地域との交流促進に努めている。</p> <p>2. 全体的に見て…: 母体法人は認知症ケアの先駆者として全国的にも有名で、毎年厚生労働省や県・市町村の新任職員の研修受け入れを実施している。落ち着かず徘徊し自殺願望のあった人が、職員がマンツーマンで深く関わらうちに表情も良くなり穏やかになったとか、胃ろうの人が少しずつ口から食べるうちに体力回復していった等、人間性を取り戻し良くなったケースも多い。認知症啓蒙拠点として地域に貢献していく事を期待している。</p>		